〔開國起原 慶應年間邦內之形勢四〕兵庫御開港ニ付、商社取建方、幷御用途金見込之儀申上候書付、

此度兵庫港御開可相成ニ付而は、是迄長崎横濱兩港之仕來ニ而は、開港に相成候度毎ニ御損失ニ相成、西洋各國おゐて、港を開き政府之利益を得候方法とは相反し、實以奉恐入候次第、右は全く商人組合之仕法無之、薄元手之商人共、一己々々之利慾に而已耽り候故之儀と奉存候、將又兵庫幷大坂え外國人居留地御取設相成候ニ付而は、兩所地平均築立等ニ而、凡貳拾万兩程は相掛り可申、其餘運上所、波戸場、常夜燈掃除方、役々御役宅、西國往還、西之宮ゟ兵庫迄之間道附替、其外に而總計いたし、八九拾万兩は、當年之御出方ニ相成可申、尤地平均築立等は、居留地御貸渡ニ相成候へば、御入費元高は相返り可申候得共、借受人急速無之節は、一時ニ繰戻し候譯ニは參り不申、運上所以下御用途金は、年々税銀ニ而御仕埋之積りニは候得共、是等も一時ニ繰戻兼可申、兎も角も差向候處、當年丈ニ而八九十万兩之御出高に有之可申候處、近來御多端之折柄、御用途も相嵩、當年中ニ而八九拾万兩之臨時御出高不容易義ニ而、假令御差繰相成候共、當節之形勢少も御貯蓄ニ相成置、非常之急需ニ御差向置之方可然、就而は右御開港ニ付、商社取建方、幷御用途金出方之儀勘辨仕、存付候儀、左ニ申上候、

一大坂町人共之內、身元宜敷者廿人程人撰仕、兵庫開港場、交易商人頭取申渡、右之者組合諸商買取引いたし、其餘望之者は、右廿人之組合に入、取引致候積、一體交易筋は、商人共一己之利益のみを貪り、薄元手之者共、互に競ひ取引いたし候樣に而は、元手厚之外國人之爲に利權を得られ、當時横濱表商人之如く、今日僅に千金之益あり候共、明日直ニ壹万之損失出來候義は、全くは商人組合不申、一己々々ニ而取引致候より、右樣之次第ニ陷り候儀、右は商人一己之損失計之樣ニ相見候へ共、一商人其利を得ざるは、一夫其所を得ざると同じ理ニ而、即御國內おゐて夫丈之損失ニ相成、十商人之損失も、百商人之損失も、其商丈御國之損失ニ相成、遂ニ全國之利權を失し、外國